

# 新聞通信調査会報

毎月一回一日発行  
昭和40年2月20日  
第三種郵便物認可

8-1999

## 容易になった中国奥地の旅

### 新疆、西藏、中央アジア歴訪

坂井定雄

(龍谷大学教授)



シルクロードの西端に立つ

一九七三年に共同通信のペイルート特派員に行つたことが私とシルクロードとの付き合いの初めだ。シリア内陸部のパルミラにローマ時代の遺跡があつて、二回ほど行つた。その小さな博物館で、「ここはシルクロードの時代に栄えた」という記述を読んで驚いた。パルミラから東方はシリア砂漠がある。はるか彼方まで道らしいものが続いていて、これがシルクロードの西の端なんだ、いつの日か中国まで行ってみたいと思つた。

一方、東端は、一九七八年に中国の西安(昔の長安)に行つた。そこから西の方を見ながら、シルクロードの東の端に来たぞ、これから間をぼつ

ぼつ埋めながらあちこち行つてみたいと思つた。

その後、NHKで『シルクロード』の大報道があつた。敦煌を中心に編集されていて素晴らしいが、もっと西の方がさらに素晴らしい。

一九七九年に中央アジアに行つた。その後アフガニスタンにも行つた。アフガニスタンは三蔵法師がインドへ行くとき通つた所で、シルクロードというより仏教伝来の道だ。中央アジアには貴重な遺跡群が保存されているし、バザールが至る所にあつて野菜は豊富だし、社会主義体制にもかかわらず自由に物が売買されていた。スターリンが一九三〇年代に沿海州から強制移住させた朝鮮人がウズベキスタンとかカザフスタンにたくさん住んでいる。その人たちがすっかりそこに根を生や

して生活していて、バザールではキムチも売つていた。

私が一番好きなのは新疆ウイグル自治区だ。この五年間に三回、通算して二カ月ぐらい滞在した。一昨年はトルコからウズベキスタン、カザフスタン、それからバスで新疆ウイグル自治区まで行つて雲南省からタイに出て、三カ月間にわたりに、中央アジアを旅する機会があつた。昨年は手ベツトへ十日間行つてきた。

世界で一番海から遠い町

新疆ウイグル自治区の首都・ウルムチからカシユガルまで、タクラマカン砂漠(昔の天山南路)に沿つて六月末に鉄道が敷かれると聞いた。新疆鉄道といつて中国が建国五十周年の大事業として進めていた。カシユガルはタクラマカン砂漠の一番奥の町で、シルクロードの重要な町でもある。私が三年前に行つたときはランドクルーザーをチャーターして千七百キロの道を三日かけて行つた。一応、舗装はあるが、気候が激しいから至る所で舗装ははげ、道路が寸断している。今年から汽車で行けるので、来年あたりは「タクラマカン砂漠で汽車に乗ろう」というツアーが売り出されるかもしれない。

新疆ウイグル自治区は中国全体の六分の一の面積を占める広い地域だ。ウルムチに最初に行つたときに迎えるにきてくれた人が「地球上で一番海から遠い首都へよくいらっしやいました」と言つた。中国の行政上は州都になるが、海から一番遠

い町、アジア大陸のど真ん中がウルムチだ。もととは小さな町だったが、中国建国以来、中央政府はウルムチを新疆支配の中心地として漢民族をどんどん送り込み、今では漢民族が過半数を占めている。新疆ウイグル自治区全体では人口千五百万人ほどだが、漢民族はまだ五割に達しない。半数以上がいわゆる少数民族の人たちで、一番多いのがウイグル族だ。

中央アジア全体がほとんど、トルコにつながるトルコ系民族で、ウイグル族もトルコ系民族だから漢民族とは顔も言葉も全く違う。いろいろな血が混じっているせいか、ウイグル族の女性には美人が多い。今も漢民族が続々入植しているが、漢族の男たちがウイグルの女を追いかけ回している。タクラマカン砂漠の南側にあるホータンという町は、美人の産地として唐の時代から有名らしい。ホータンに行くとき女性のとりになつて帰ってこなくなるという伝説がある。

#### 漢民族とは別の文化

公式数字では中国には少数民族は五十五ある。そのうちの四十七の民族が新疆ウイグル自治区にいる。ここでは千五百万人のうち九百万人が少数民族だ。民族が多様ということは文化が多様で、顔も多様、歌も多様、芸術が多様、衣服が多様、そういう意味で大変魅力的だ。それから自然変化に富んでいる。標高六、七千メートル級の天山山脈があり、氷河がある。中国で一番広い、日本の面積と同じぐらいのタクラマカン砂漠がある。山

が高いから雪がたくさん降る。雪が解けて水になる。その水を効果的に利用するためにカレースという地下水路を作つて、オアシスでぶどうとかスイカを中心とした農作物ができる。

山の上の方は雪があるが、少し下へ来るとゴツゴツした岩脈がむき出しに走っている。もう少し下ると荒々しい、『西遊記』に出てくるような風景が至る所にある。『西遊記』に「火山山」という山が出てくるが、赤い山肌が水で浸蝕されて筋状になつていて、火が燃えているように見える。シルクロードの町で敦煌の次に歴史的に有名なトルファンは海面下で、トルファン郊外の湖はマイナス百五十七メートルという低さ、中国で一番低いところだ。夏に行くと気温は五〇度、六〇度になつて本当に暑い。私が行ったときは五〇何度あった。土地全体が燃えているようだ。

新疆に行くのは割合に簡単で、北京、上海から飛行機で二時間半ほどでウルムチへ行ける。ウルムチからカシュガルまで飛行機で約一時間、主要都市までは国内線が飛んでいる。しかし、車で行く、あるいはバスで行く、となると大変。カシュガルへ行くにはウルムチからランドクルーザーで三日かかる。一番北の端のアルタイ山脈に行くにはウルムチからランドクルーザーで二日かかった。

新疆ウイグル地区の南にある南疆地方は砂漠で、周辺にオアシスがたくさんある。そのオアシスをつないでシルクロードがあるわけだが、沿道

の町々は数は少ないが非常に魅力がある。例えばクチャの郊外にはギシル千仏堂がある。岩に穴をうがって仏像を描いた、敦煌にあるようなものだが、岩窟は五百力所ぐらいあって、これが見事だ。六世紀から八世紀にかけてギシル王国で発達した仏教芸術だ。しかし、描いてある絵を見ると、キシルの人たちはアーリア系だから漢民族とは別な顔をしている。それだけに文化が全然違つて感じがする。

カシュガルに行くと、ここでは中央アジアの風が吹いている。宗教はイスラム教、人々の着ているものはウズベク共和国と同じ、言葉もトルコ系の人たちと同じ、まさに中央アジアだ。新疆ウイグルの主たる住人はトルコ系の人たちだ。

#### 壮大なポタラ宮殿

チベットは中国の成都から飛行機で一時間ほど。ウルムチへ行くのもチベットへ行くのも日本からの飛行機代は十五万から二十万円ぐらいだ。チベットにはご存じのヒマラヤがあるが、首都のラサにあるポタラ宮殿が素晴らしい。長さが約三百六十メートル、百十メートルぐらいの高さの丘の上に建っている壮大な宮殿だ。私の記憶では一続きの建物でこれ程壮大な宮殿はクレムリンが比べられるぐらいと思う。何とも言えない景観だ。建物の中の半分はダライ・ラマが住む場所、歴代のダライ・ラマが仕事をしていた場所。もう半分は歴代ダライ・ラマのお墓とチベット仏教の行事をする場所になつている。ざっと千室ほどあつ

てどの部屋も立派な仏教芸術で埋まっている。ナンカ(譚歌)という仏さんを描いた絵、曼陀羅まんだらというあの世の世界を描いた図などが至る所にあつて、ゆつくり見て回つたら何日もかかる大ミュージアムだ。

一九五〇年代にチベットの人たちが反乱を起こして中国軍が入ってきたとき、それから一九六〇年代の文化大革命と、二度にわたりチベットのお寺の大部分が壊された。残つたのはラサにあるポダラ宮殿など数カ所だけで、これは周恩来元首相の必死の努力で守られた。

チベットを旅するのは大変だ。私はラサから二番目の都市のシガツエまで行つたが、二百八十キロの道程を十二時間ぐらいかつた。ヤルゾツポ川という大渓谷を削つた岩肌を行くのだが、至る所が崩れている。う回したり川底を通つたりして行くのだから大変。エベレストを見る場所まで行くには二日かかる。チベットを知っている人が一度は行つてみたいカイラス山は、ガイドの話では往復最低三週間かかる。お金さえ払えば行ける。車とガイド付きで一日約三万円だ。

よく聞かれるのは高山病だ。ラサは標高約三千七百メートル、飛行機が発着する成都是標高四、五百メートルだから、一時間ほどで三千メートル上がるわけで、富士山の山頂までいきなり行くようなものだ。多かれ少なかれだれでも高山病になる。私もなつた。現地に入つてしばらくすると頭が痛くなるが、三日ぐらいで直る。チベットはま

だ旅行がしにくいのは確かで、いきなりボンと行くわけにはいかないが、日本の中国旅行社で現地のホテルや通訳をアレンジしてくれる。

#### 昔の面影残すウズベク

新疆ウイグル自治区の隣が中央アジアの一番端のキルギス、その隣がウズベキスタン、アジアのちよつど真ん中ぐらになる。ウズベキスタンの東部にフェルガナ盆地があるが、このフェルガナ盆地は漢の時代に大宛(だいえん)国があつて、漢の武帝が派遣した張騫(ちやうけん)が到達した場所だ。昔ここに汗血馬といわれる幻の特産馬がいたという。張騫は帰ってくるときに、ブドウとザクロとクローバーを持ってきた。それが中国、そして日本へ渡つた。

シルクロードは一本ではなくいろんな道がある。天山山脈の北側に天山北路があり、南側がタクラマカン砂漠。その間の天山山脈の南のふもとに辺りに天山の雪が溶けて流れてきてオアシスが出る。そのオアシスを伝つた天山南路がシルクロードのメインルートで、カシュガル、サマルカンドを通つて中東に行く。古代ペルシャ帝国の時代からパミール高原の西の方は道が開けていたが、東の方からの道は張騫が行つたころにやつと出来た。張騫の後から通商路として物の往来が始まり、二世紀ごろからシルクロードが出来るようになって、唐の時代に一番盛んになる。

成吉思汗が十三世紀にこの辺を侵略して徹底的に破壊した。その後、十四世紀から十六世紀にか

けてチムール帝国が素晴らしい建築物を作つた。チムールの建築物は現在そっくり残つている。中でも有名なのがサマルカンド、プハラ、ヒワという古代都市で、いずれも国連の世界歴史遺産になつている。ソ連時代の歴史教育では、チムール大王は民族主義に凝り固まつた暴虐な帝王、悪い人間とされていたが、今では歴史上の英雄として復活している。ウズベキスタンの首都・タシケントの公園の真ん中にチムールが馬に乗つた大きな銅像があつて、そのそばにチムール博物館が出来ている。受け入れ態勢が悪いために中央アジアはツアーが全然ないが、やがてこれも対象になると思う。本当にシルクロードらしい場所だ。

フェルガナ盆地はアムダリア川、シルダリア川という、天山山脈に続く山脈から流れてきたパミール高原の水を使つて昔からかんがいが行われている。スターリン時代にこの水を徹底的に利用して綿花の大生産地に変えて、今も綿がたくさんとれる。馬はもういない。昔の名残としては、盆地の中のマルギランという町で絹を生産していて、中国との交易が盛んだったころ、中国から持つてこられた絹が現在も生き永らえていて大きな織物工場がある。ローマ帝国から中国へ通じるシルクロードの面影がウズベキスタンには今も色濃く残つている。

(本稿は六月十八日、同盟クラブでの講演会から一部を要約、文責編集者)

## 「原爆外交」が冷戦促進 対ソ威嚇が逆効果に

金子敦郎

(大阪国際大学教授)

「原爆シーズン」が近づいてきた。広島・長崎への原爆投下は必要だったのか。今年もまた、原爆投下によって日本上陸作戦を回避し、百万人の犠牲者を出すことなく日本降伏を早めたとする「歴史のカバーアップ(真相隠し)」が語られるのだろうか。トルーマンは原爆を、終戦が近づくとともに対立の相手を深めていたソ連を威圧するための外交カードとして使った。これが「真相」である。しかし、スターリンには逆効果だった。トル

ーマンのこの「原爆外交」は、ヒロシマ・ナガサキの大虐殺を生んだだけでなく、米ソを対立に駆り立て、恐怖の核軍拡競争へと突き落としていった。原爆はその後、半世紀に及ぶ冷戦の触媒となった。米国歴史研究の最前線を報告する。

### 原爆外交の挫折

トルーマンがなぜ原爆を投下したのかについて、これまでの多くの研究は、次のようにいくつかの複合的背景を挙げている。

巨額の開発費を投入して開発に成功した新兵器は使うというのが、戦争の論理、戦争の勢いとして当然だった。狂信的な日本軍部は一億玉砕を掲げ、徹底抗戦の構えをとっており、犠牲の大き

い上陸作戦を避けて、原爆投下で早期降伏を実現しようとした。使われない戦争がさらに長引くとすれば、議会や世論の追及を受けると考えた——などだ。

これに対して、原爆投下の狙いはもっぱら対ソ外交にあったと分析したが、米歴史家G・アルペロピッツだった。新たに貴重な資料を発掘、それを駆使した詳細な研究書「原爆使用の決定」(一九九五年)は説得力に富む。その要点は、昨年一月一日付の本会報に紹介させてもらった。しかし、原爆投下の歴史的な意味は、ヒロシマ・ナガサキで終わらないし、終わらせてはならないと思う。原爆投下が次にくる冷戦にどのようなインパクトを与えたのだろうか。

日本の降伏で第二次大戦が終わって間もなくの一九四五年九月、ポツダム会談で積み残した問題を話し合う米英ソの外相会議が開かれる。バーンズ米国務長官は、その威力を実証した原爆をポケットに入れて行くのだから、ソ連は言うことを聞くに違いないと、勇んでロンドンに乗り込む。

このバーンズに対して、ヒロシマ・ナガサキのあまりの惨状に衝撃を受けたスチムソン陸軍長官

らは、ソ連の協力を求めて原爆の国際管理を急ぐよう進言するとともに、「原爆外交」の愚かさを説いている。しかし、バーンズは取り合わなかった。スチムソンはトルーマンに、バーンズのやり方はカウボーイ流だと慨嘆した。

バーンズは上院でトルーマンの「指南役」だった。ルーズベルトの死で突然、大統領に昇格し、ぼつ然とするトルーマンの「黒幕」となり、国務長官のポストも物にする。政府首脳部の多くの進言を退けて「原爆外交」に突っ走ったのはバーンズだった。

バーンズはロンドン会議前夜のパーティーの席で、冗談めかして、いつでも原爆をお見舞いするとモロトフ・ソ連外相を脅した。だが、バーンズの期待とは逆に、会議でモロトフは東欧やドイツ問題で米国にことごとく反対する。米国はモロトフに「ミスター・ニエツト」の異名を献じたが、バーンズには大きな衝撃が残った。

バーンズは議会政治のベテランで、現実的政治家だった。「原爆外交」が思うように通用しないと分かると、十二月のモスクワでの再度の外相会議で、ソ連と現実的妥協を図る。これがトルーマンや側近の不興を買い、一九四七年初めに辞任。トルーマンも今や独り立ちし、バーンズ主導で始まった「原爆外交」は、そのバーンズを超え、トルーマンの直接指揮下に走りだしていく。

### パランス・オブ・パワー

冷戦の発火点は東欧だった。そこからギリシ

ヤ、トルコ、イラン、極東、ドイツへと冷戦の舞台は広がっていく。だが、振り返れば冷戦は「自明」だが、双方に最初から確たる「冷戦戦略」があつたわけでもないし、冷戦へのステップが順序よく準備されていたわけでもない。

ルーズベルトは大西洋憲章に沿って、第二次世界大戦の終結を、世界大戦を度々引き起こしてきたパワーポリティクスと植民地支配構造を解消する好機と考えていた。「大同盟」のパートナーとして戦勝に貢献したソ連が、戦後世界に米国に次ぐ大国として大きく浮かび上がるのは確実で、その現実を受け入れ、協力させなければならぬ。戦後世界の秩序は、米、英、ソ連に中国を「大国扱い」して加え、この「四人の警察官」が責任を担う。これがルーズベルトの構想だった。

しかし、スターリンは根っからのパワーポリティクス信奉者だった。戦争で生じた空白に入り込み、ソ連に好ましい新しいバランス・オブ・パワーを作り出そう。それがスターリンの基本的な構えだった。チャーチルもスターリンに劣らぬパワーポリティクス政治家。広大な植民地に基盤を置く大英帝国の復活を目指していた。欧州戦勝利のめどがあつた一九四四年十月にはスターリンとの間で、バルカン半島での両国の勢力バランスを取り決める「線引き」でひそかに合意している。ソ連赤軍はドイツ軍を撃破して東欧諸国を解放し、各国に共産勢力を核にした政権を打ち立てていった（ユーゴは自力解放）。キッシンジャーに

よれば、「共産主義の膨張」というよりは帝政ロシア以来の伝統的安全保障観にもとづく緩衝地帯設定である。ルーズベルトはそれに理解を示しつつも、早期の自由選挙を要求した。スターリンがなかなかこれに応じないため、米政府内に反発が強まるなかルーズベルトが死去。トルーマンの下でハリマン駐ソ大使らの、対ソ強硬姿勢を唱える発言が勢いを得ていく。

原爆はまだ実験以前で、ハリマンらは戦争で疲弊したソ連に対しては、経済援助をちらつかせれば切り札になると考えていた。やがて原爆開発成功のめどがつき、バーンズ主導で、対ソ外交の切り札は原爆が取って代わる。

「虚勢」と現実主義と

スターリンにとつて、原爆とは何だったのだろうか。キッシンジャーは、ポツダム会談での最大の出来事は、トルーマンがスターリンの耳元に「かつてない威力の新爆弾」の開発に成功したとささやいたことだという。米政府の中には、原爆開発に成功したことをはつきり明かして、国際管理への協力の道を探るのが得策との意見もあつたが、トルーマンとバーンズは退けた。

スターリンはこれをあからさまな脅しと受け取つたが、無関心を装い、さりげないやり取りを交わすだけで、「軽視」する道を選んだ。トルーマンは、スターリンが原爆とは分からなかつたと喜んで、これはあまりにも甘い判断だった。スターリンは大きな衝撃を受け、すぐにソ連の原爆開

発担当者に、計画のスピードアップを厳命している。

スターリンはヒロシマのあと、日本降伏前の駆け込み参戦を急ぎ、八月八日対日宣戦布告。それを通告するためにハリマン米大使を招いた。ハリマンは、スターリンが突如として原爆が出現したことによつて、ソ連赤軍の優位が相殺されたことを受け取り、彼らの昔からの欧米に対する不安感を再生させたに違いないとの感想を抱いている。

スターリンは同時に、米国がまだ数発程度の原爆しか持つていないことを見抜いていた。いままずくに現実的な原爆の脅威があるわけではない。急いで追いつかなければならない。だがその間に、米国は原爆独占を背景に高圧的な対ソ外交に出て、彼らの思う通りの戦後処理を押し付けてくるだろう。それにはひるまない。スターリンがとつた対抗策は、こうした「虚勢外交」である。モロトフの「ニエツト」がそれだった。

スターリンはしかし、現実主義者だった。最近の研究によれば、「虚勢外交」が米国との衝突にまで突き進むことは慎重に避けた。東欧では結局、自由選挙に応じ、ソ連の完全な衛星国化には時間をかけた。イランにおける石油資源をめぐる英国との確執も、最後はあっさり手を引いた。ギリシャの共産ゲリラへの支援は控え、見殺しにした。ダーダネルス、ボスポラス両海峡支配を狙ったトルコ進出も深追いしなかつた。旧満州からも淡泊に引き揚げている。欧州に展開していた

赤軍も、実際には大急ぎで動員を解除し、帰国させ、国防予算も急速に削減している。

「封じ込め」の真意は

だが米側は、米国が原爆を独占しているのに、なぜソ連は協力的にならないのかが分からず、いら立ちを深め、ますます「原爆外交」を振りかざしていく。

一九四六年三月、野に下っていたチャーチルがトルーマンの郷里ミズーリ州で演説。「鉄のカートン」という言葉を歴史に深く刻み込んだこの演説は、ソ連に対する米英連合を呼び掛けたもので、トルーマンと相談済みだった。しかしこの時点では、バーンズ、アチソンら米外交当局は、ソ連を刺激するだけとみて、むしろ困惑している。

相前後して、モスクワ大使館参事官G・ケナンの「長文電報」が入っている。電報はこう進言していた。ソ連外交はその体制そのものに根ざす。米国とソ連の目標、哲学は相いれない。いずれソ連の体制は変革される。対ソ政策は、ソ連の膨張傾向にたいする長期の辛抱強い、確固として注意深い封じ込めでなければならぬ。ケナンの電報は米政府内で高く評価され、ソ連を「悪」とする強硬な対ソ政策の格好の理論となっていく。

この「ソ連封じ込め論」は、政府首脳の示唆で翌一九四七年七月のフォーリン・アフェアーズ誌に匿名で掲載され、「対ソ戦略」として広く知られるようになる。だがケナンの真意は、政治的脅威に対する政治的封じ込めだった。ケナンは後

年、その意に反して冷戦が「危険な軍事的封じ込め」となっていたことを慨嘆し、批判している。

「長文電報」から一年後の一九四七年三月、ギリシャ、トルコ支援を訴えて、「武装した少数派や外部からの圧力による征服の企図に対して抵抗している自由な人々を支援するのが米国の政策」としたトルーマン・ドクトリンが打ち出される。

この演説草案はアチソン國務次官が起草したが、ケナンはソ連を刺激すると懸念を表明している。

同六月マールシャル計画発表。ケナンはソ連、東欧にも門戸開放の計画として描いた。ソ連は当初、関心を示すが、結局は米国に主権を売り渡すとして参加を拒否した。

冷戦を決定的にしたのは、ドイツ問題だった。歴史的にドイツに脅かされてきたソ連（ロシア）には、ドイツの復活が最大の脅威だった。ドイツは徹底的に非軍事化・弱国化されなければならぬ。そのためにも巨額の賠償を取り立てようとした。しかし米英は、飢餓に瀕する欧州を救うためには、欧州経済の中核となってきたドイツ経済を急いで復興させなければならぬと考えた。双方の対ドイツ政策は基本的な対立をはらんでいた。

ルーズベルトとスターリンはヤルタ会談で、ドイツ分割の密約を交わしていたともいわれるが、米英とソ連の対立はドイツ分裂へと突き進んでいく。一九四八年六月ソ連がベルリン封鎖、対抗する西側の大空輸作戦で冷戦に大きく踏み込む。一九四九年八月ソ連原爆実験成功、九月共産党によ

る新中国誕生、そして翌五〇年朝鮮戦争。西側はソ連がいよいよ軍事侵略を開始したと受け取った。

誤解と幻想

ブレジンスキーは、冷戦は不可避だったのだろうか、米ソ双方ともそれぞれ相手方が侵略的意図を持っていると認識することによって動かされた——と振り返っている。キッシンジャーも、スターリンはソ連を再建し、同時に米国と対決するという危険を冒すことはできず、派手に宣伝された西欧侵略は幻想だったと言う。こうした「誤解」の上に冷戦が組み立てられていった。

バーンズの「原爆外交」は、冷戦への移行を加速させた（キッシンジャー）。一方は原爆が強力な政治的道具になると期待し、他方はそうなることを恐れる——ロンドン会議の失敗と米ソ関係悪化に貢献したのは、こうした「原爆外交」だった。原爆の登場は、スターリンが描いていたかもしれない西側との協力を、予想より早くご破算にしたと思われる。原爆は戦時中の同盟の破壊と冷戦の開始を促進した（D・ホロウエー）。

原爆は冷戦の主たる触媒だった。原爆が冷戦を作り出したのではない。原爆がなくても冷戦はあつた。しかし、触媒がなければ、その化学反応は起こりにくかったかもしれない。原爆という触媒によって、冷戦は反応を促進され、しかも極めて危険なまでに軍事化されたのである（G・アルペロピッツとK・バード）。



### 世界を制覇したCNN

#### コソボ戦争が追い風に

米国の二十四時間ニュース専門有線テレビ網のケーブル・ニュース・ネットワーク(CNN)がコソボ戦争をきっかけに、二十四時間ニュース報道で世界に盤石の地位を築いた。米国の商品で世界で最もよく知られているのはコカコーラとCNNだ。北大西洋条約機構(NATO)のユーゴ空爆戦略には賛否両論があるが、戦争のあるところ世界のどこへでも潜り込む、というCNNの突撃精神は評価されてよいだろう。CNNは国際部門についてはCNNインターナショナル(CNNI)という別会社を持っているので、以下CNNIと呼ぶことにする。

CNNIが一躍有名になったのは、一九九一年の湾岸戦争である。同テレビのピーター・アーネット記者が開戦後もイラクのバグダッドに踏みとどまって、ミルク工場や民間シエルターへの爆撃というイラク側に都合のよい報道をしたと非難されたこともある。今回のNATOのユーゴ空爆でも、NATOは厳しい報道管制を敷いたが、現地CNNIの記者には通用せず、CNNIは民間施設の爆撃についても詳しく報道した。

それはユーゴのミロシエビッチ大統領にとって

も好都合だった。CNNIは今もバグダッドに「オフィス」を持っている。フセイン大統領がメリットがあると判断しているからだ。米政府はCNNIをフセインの宣伝の「拡声器」と決めつけ「支局」と呼ぶことを認めていない。しかしホワイトハウスも、情報の第一線にいる中央情報局(CIA)の作戦室も海外の動きはまずCNNIで見ている。ミロシエビッチ大統領も見ているし、エリツィン・ロシア大統領もそうだ。CNNIがキューバに支局を開設できたのも、カストロ議長がその利用価値を認めたからだろう。

コソボ戦争でCNNIの視聴率が急増したのは戦場が欧州のど真ん中であつたことも有利に働いた。湾岸戦争の際、米国以外でCNNIを見た世帯は一千万だったが、コソボ戦争では一億五千万に跳ね上がった。米国内では国際ニュースの関心が低下しており(戦争などは例外)、主要新聞やテレビ網は海外の支局を減らしているが、CNNIはますます海外を重視するようになっていく。米国内ではCNNは八千万世帯に普及した。

湾岸戦争以前は、CNNIを見る人はほとんどが海外旅行中の米国のビジネスマンで、ホテルの有線テレビで、米国の株式市況とか、お気に入り野球チームの成績などがよく見られた。しかし今では完全に「国際化」して、CNNIの社長は英国のBBC放送に二十七年勤めたベテラン記者のクリス・クレマー氏だし、世界中に散っている記者や本社の編集者は世界の人種の見本市のよ

うだ。CNNIのニュースのうち、米国発は10%にも満たない。

CNNIの唯一のライバルはBBC放送の二十四時間ニュース専門番組だが、BBCは英国以外の視聴者が六千万とCNNIの半分以下だ。発生ニュースではCNNIに一日の長があるが、ニュースの解説や分析では伝統のあるBBCに軍配が上がる。海外支局の数もBBCが四十五、CNNIが二十四だが、CNNIは記者や解説スタッフ強化に大金を投じており、その差は縮まっているというのが、米報道界の大方の見方だ。CNNIの昨年の収入は一億九千五百万ドル(広告と視聴料が半々)で、利益も約五千万ドルに達した。それだけニュースの充実に投資できるわけである。

世界制覇を実現した今、CNNIがやっているのは、「地域化」だ。世界中で同じニュースを流すのではなく、世界を欧州、中東・アフリカ、アジア、中南米に四分割して、それぞれに特色のあるローカルニュースをきめ細かく流すというのが、アンカーも地元の人を使っている。CNNIが次に狙っているのは朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)だ。朝鮮半島で戦争が起きることを期待しているわけでもないだろうが、CNN本社は国際部門統括責任者、イソン・ジョーダン氏はこれまでに九回も北朝鮮を訪問して、支局開設に向けて着々準備を進めている。

(佐々木謙一＝同盟クラブ会員)

## メディア談話室

## 「説明責務」と「知る権利」

田所 泉

情報公開法の成立(五月七日)には、国会で全会一致ということもあってか、マスメディアはこぞって賛意を表明した。修正から成立に至る経過については、本誌六月号で後藤正明氏が詳しく解説している通り、内容そのものに玉虫色の部分も残っているだけに、ほかの重要法案をめぐってこのところ意見の対立が目立つ各紙も、前向きに受け止めていたようだ。運用への注文、次のステップは何かなど、法律の施行に向けて議論がさまざま出るなかで、この法律とマスメディアの任務についての考察は案外少なかった。社説ではわずかに、「朝日」が五月八日付「使いこなす力を養おう」の末尾で触れた程度である。

## 情報公開時代のマスメディア

「国民だれもが行政情報に接することができる時代になる。報道機関にとっても、ニュースの発掘や分析にあたって、これまで以上に鋭い問題意識が求められる」と「朝日」は言う。そして結びに、「情報公開法は、新聞にとっても自らを鍛え直すチャンスと受け止めたい」とある。

これだけでは何のことがよく分からない、と普

通の「朝日」の読者は思うだろう。報道機関の仕事の内容や問題点が何なのか、あまり知られていないためである。事情を知る者にとっても、抽象的で分かりにくい。

『総合ジャーナリズム研究』(東京社)の一九九九年夏号の、坪井明典・毎日新聞論説委員による『情報公開時代のマスメディア』という論文は、事態と今後の方向を明快に示している。

「まず言えることは、これまでのような取材、報道姿勢は通用しなくなるであろうということだ」と論文は言う。記者クラブにトグロを巻いて「発表もの」を待っているのでは駄目で、一方にインターネットの普及があり、文字メディアは速さの点でインターネットに完敗する。情報環境の変化で記者クラブは取材拠点の役割をほとんど喪失し、マスメディアが「知る権利」の代行者、という自称・自負は実情と合わなくなっていく。

そこでジャーナリストは何をするのか。坪井論文は、行政が公開制度で、あるいはインターネットで開示する「生情報」を整理・総合すること、行政側が開示しない情報に迫り、その中から行政を正し、社会にとって有意義な情

報を提示していくこと——の二点を挙げる。私見では、の点が特に大切と思う。

自明のこととして坪井論文では触れられてないが、マスメディアは当然、これまでと同様に、情報公開制度を活用する市民の運動に目を向け、詳しく報道することによって経験の共有をもたらし、行政の適切な対応を促し、不適切な対応を批判することを続けるべきだろう。恐らくそれが、二十一世紀の日本の「市民のジャーナリズム」につながるはずだ。

## 見えにくい文書管理

ところで、情報公開法は、第一条の「目的」に「知る権利」を明記する代わりに、「国民主権の理念にのっとり……政府の有するその諸活動を国民に説明する責務が全うされるようにする……」と、「説明責務」を盛り込んだ。これはアカウンタビリティー(これまで「説明責任」と訳されることが多かった)の訳語で、国民主権という憲法の大原則から導き出される政府の責務、という位置付けである。

国民主権の憲法が出来て半世紀、それにこたえる責務がどうしてなおざりにされてきたのか、といった後ろ向きな批評はさておき、その責務を果たすにはそれなりの準備が必要だ。公布から施行までの「二年以内」という期間は、長過ぎるか短か過ぎるか、立場によって議論があるだろうが、ともあれ二十一世紀の最初の年にこの法律は施行され

る。

それまでに政府は何をするか。法律をよく読むと四〇条、四二条と付則の一部に規定があつて、情報提供に関する施策の充実、地方公共団体の情報公開の促進、特殊法人の情報公開に関する新規の立法などが予定されている。政府自体の仕事としては、政府情報の管理・整理ということになる。

「情報公開と文書管理は車の両輪」という主張が、社説などに見られた。もっともなようだが、一方の車輪が見えにくいのが難点だ。

二年がかりのお役所の文書管理・整理を外から大づかみに眺めると、次のように情報を三区区分することが想定される。

請求がなくても積極的に開示するもの  
請求があれば開示しなければならぬもの  
何が何でも不開示のもの

このうち は広報、発表、自己宣伝に属するもので、これまでも盛大に開示されてきた。ただし、まれにスクープやリークの結果として、記者クラブなどで追っかけて開示される、渋々、追認の情報もある。

との区分は、恐らく慎重に、法に示された開示と不開示のケースを吟味しながら進められるだろう。国益だけでなく、日本の官庁特有の省利省益も絡んで、法解釈、開示か否かの判断は複雑なものとなる。『相当の理由』……『おそれ』という境界あいまいな文言が、情報を隠したい側の

格好の口実となる。

ついでに言つと、不開示規定の第一、「個人に関する情報」は、行政の過程で自然に集積されるのだが、不開示にするためには一層念入りに「管理」されるべき対象となる。政府は個人のごにお節介を焼かないのではなく、必要とあればいつでも個人を丸ごと把握・処理できるように、例えば「住民基本台帳」による個人の識別が徹底する。文書管理とはそういう一面を持つ。

不開示情報の取材と報道を

不開示情報のマスメディアによる収集と探知、そしてメディア自身の判断に基づく大胆な公表、という坪井論文の要請が大きな意味を持つのは、それこそが行政側が安易に不開示情報を拡大しないようにする歯止めの役割を果たす点にある。防衛や外交の秘密という「聖域」でさえ、相手国が公開した情報によってザザ漏れになるのがこの世の習いだ。まして、官庁が表に出したがらない数多くの情報は、いったん公開されれば何とということはない。幽霊の正体見たり枯尾花。

お役所が、無意識にあるいは意図的に不法、不当な行動をし、国民の権利を侵害しているような事実に関する情報は、大抵秘匿される傾向にある。一九五二年の「菅生事件」で、警察の駐在所爆破の真犯人と目される人物が、実は現職警察官だったことを突き止め、本人を確認して報道したのは、一九五七年三月、共同通信社社会部員六人

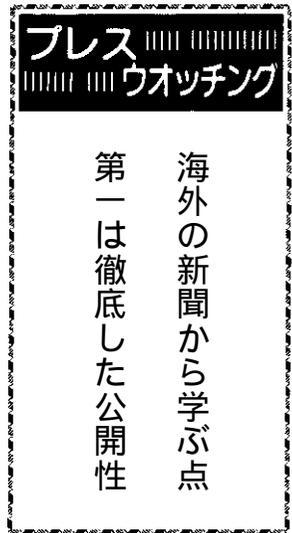
の「特捜班」だった。その中心の一人がまだ三十歳になる前の故斎藤茂男記者だった。斎藤記者をしのぶシンポジウムでの話で、改めて当時を思い出したのだが、警察はついにこれほど明白な事実を認めなかった。しかし警察を除くすべての者が、裁判所を含め、事の真相を知り得た。無実の人びとの人権という公益のためには、記者が警察官を「逮捕」することも許される。

恩賜の民権、回復の民権

「説明責務」と「知る権利」をめぐるいろいろな論議があり、前者は後者を否定するものではないとする法律学者の説もあるのだが、議論をたどりながらふと、今から百年余り前、中江兆民が『三醉人経論問答』に記した南海先生の説を思い出した。

世の所謂民権なる者は、自ら二種有り。英佛の民権は恢復的の民権なり。下より進みて之を取りし者なり。世又一種恩賜的の民権と称すべき者有り。上より恵みて之を与ふる者なり。恢復的の民権は下より進取するが故に、其分量の多寡は、我れの随意に定むる者なり。恩賜的の民権は上より恵与するが故に、其分量の多寡は、我れの得て定むる所に非ざるなり。

「説明責務」とは、よく考えてみると、政府が恵与した範囲での情報開示を規定する文書にふさわしい。「知る権利」が下からの進取の権利であることは、言うをまたない。(中央大学講師)



## 海外の新聞から学ぶ点 第一は徹底した公開性

日本の新聞——二つの評価

日本新聞協会の新しい会長に六月就任した渡邊恒雄・読売新聞社長のインタビューが、新聞協会報（六月二十六日号）に載っている。

新聞界は、内には再販指定維持や景品・懸賞販売解禁などの難題を抱え、外にはメディアの多様化という新しい変化を迎えている。それだけに、二十一世紀の新聞界のかじをとる協会会長には、従来にないリーダーシップと見識が求められ、その発言は注目された。

渡邊会長は「近代日本の資本主義の発展を支えたのは、普通教育の徹底と戸別配達の新聞だ。新聞は世界最高の識字率にも寄与してきた」と述べたあと、次のように断言している。

「日本だけが高級大衆紙を実現しており、今や欧米に学ぶ点はない」

それは、わが国の新聞人に共通する自負の代弁だろうか、あるいは会長個人の信条だろうか。「高級大衆紙」という格付けには、いささか気恥ずかしい気もするが、そういう評価もあり得

る。しかし、「今や欧米に学ぶ点はない」とまで確信する新聞人はそう多くないだろう。学生が書いた新聞観は、かなり違う。

「情報の出所がはっきり書いてなかったり、客観的に読めば記者の主張の押しつけのような文章もあることに気付く」

「日本の新聞は、記事に署名をしないなどたくさん問題がある」

そうした具体的な指摘とは別に、次のような厳しい総括もある。

「（高校の留字から）戻って来て、日本の新聞がすくなく読みづらく感じました。向こうにいたときは、授業や課題などにも関係してくるのでよく読んだのですが、結構分かりやすく、理解できる面も多かったのです。今は、日本の新聞を読んでも、何が言いたいのかさっぱり分からなくて、たまに『こんな記事で新聞といえるのかな?』と思うときがあります。やはり、多くの人が読んで理解できるべきではないのでしょうか」

課題 調査報道への期待

六月末、ドイモイ（刷新）と取り組むベトナムのメディアを見て、欧米からはもちろん、どこの国の新聞からも、学ぶべき点があると実感した。

ベトナムでは政府がジャーナリストにアイデンティティカードを発行している。現在約九千人がカードを所有している。日刊紙七紙（ベトナム語五紙、英語、フランス語各一紙）をはじめ全国

五百の刊行物のほとんどすべては、なんらかの政府機関や関連組織に属している。政府の補助金は年間五百億円に上る。

文化情報大臣は、「ベトナム・ジャーナリストの日」（六月十九日）に、メディアに対して自助努力を促すとともに、社会的に有害とみなされる海外生活様式の公表に警告を発している。

しかし、そうした社会体制の中でも、新聞をはじめとするメディアの役割は年々大きくなっていく。特に社会的不正や公務員の腐敗に対する追及は厳しい。

ハノイで隔日紙の記者をしているグエン・ミン・タンさんは「発行部数は数万だが、毎日、投書が百通ほど来る。社会への苦情や公務員の不正への告発などで、それを基に調査報道するのがわれわれの重要な仕事だ」と言っていた。

共同は、中国でも調査報道で「ジャーナリストたちが意気に燃えていた」と伝えている（新聞協会報七月六日号）。「広東省珠海市でこのほど、大衆がメディアを通じて社会を監督することなどを明記した新聞世論監督規定（試行）が出され、社会主義中国で開かれた報道の先駆けになるのではないかと注目されている」という。

わが国のメディアは、このところ「環境（社会）監視機能」を大いに発揮している。しかし、地方支局の若い記者たちが掘り起こした「リクルート事件」のような調査報道、つまり「国民の利害にかかわる隠された重要な事件を、記者自らが

発掘し、自ら書く」という意味での調査報道は、必ずしも多くない。

本年度の新聞協会賞の応募作（七月八日締め切り）は、編集部で五十一社六十八件に上ったが、残念ながらそうした調査報道は数えるほどしか見当たらない。

課題 記事の取捨選択

一方、一般ニュース報道における新聞のアジェンダセティング（記事の取捨選択や扱い方によって人々の思考や行動を誘導する働き）は、その偏りが、次第に大きくなるように印象づけられる。

通信傍受法や国歌・国旗法制化など、世論を二分する微妙な問題で、新聞が明確な主張を公表するのは歓迎される。しかし、世論を正しく動かすためには、公正、正確で十分な情報が読者に提供されていなければならない。編集権の独立を盾に、新聞がニュース報道をほしいままに取捨選択するのはフェアとは言えない。

最近には特に朝日と読売の選択の違いが際立つ。「六月二十四日夜、盗聴法反対、日比谷に八千人」「七月十四日、日弁連会長声明——国旗・国歌法案審議は慎重に」など朝日において読売にはなかった。

ところで、少年容疑者（被告）の氏名・写真を掲載した雑誌側にプライバシー侵害で損害賠償を命じた大阪地裁判決（六月九日）について、先月の本欄で新聞の反応の弱さを指摘した。やはり、

この問題は、表現の自由の規制に向かってさらにエスカレートした。

名古屋地裁は六月三十日、強盗殺人事件の被告（事件当時少年）を仮名で報道した週刊文春側に「仮名や経歴から本人が推定され、プライバシーを侵害した」として三十万円の賠償を命じた。

犯罪事件にかかわった少年は、地元や関係者には身元が知られるケースが多い。それに、今回の判断基準に厳密に従えば、少年事件は今後、事件や背景、裁判の経過などを含め、一切報道できなくなるだろう。

この判決記事は七月一日の各紙朝刊に載ったが、そうした問題提起はなく、朝日（東京）は記事そのものを落とした。よく調べてみると、同紙の名古屋版は本記を六月三十日の夕刊に、解説を七月一日朝刊に、それぞれ掲載しているから、東京の編集局の判断ミスは明らかだ。

課題 アカウスタビリティー

新聞にミスは付き物だ。問題の核心は、ミスを減らすための工夫と努力、そして、これまで再三触れてきたように、ミスについてきちんと読者に説明すること、つまりアカウスタビリティー（説明義務）を尽くすことにあるだろう。

ベルトラン教授（パリ大学）は、各国のメディアにMAS（メディア・アカウスタビリティー・システム）の構築を提唱している。

それは、新聞評議会でもよいし、スウェーデンのプレスオンブズマンでもよいし、アメリカのよ

うな社内オンブズマンでもよい。ちなみに、ワシントン・ポスト紙のアカウスタビリティーの実際を、同紙のオンブズマン、E・R・シップ氏の最近のコラム（Ombudsman）で見てもよい。

「一枚の写真は数千語に匹敵するが、すべての読者に同じことを語るとは限らない」

「六月三十日一面、ユーゴスラビアからの記事と写真について。記事の見出しは『反政府セルビア人、初のごぶしを突き上げ』とあるが、品位が疑われる。写真の中心人物には手首がないのだ。駄じやれ見出し大好きな読者すら『少しも面白くない』という。別の読者は『どうしてかくも残酷で無神経になれるのだ』と聞いてきた」

「手首のない人物は腕を挙げ、隣の男はごぶしを突き出している。見出しデスクは『記事の雰囲気表現しただけ』という。写真デスクは『写真の迫力を減退させた』とみる」

「編集局次長エルバートの言うように、『主観の問題』ではある。しかし、写真の図柄と説明、見出しを総合して、もっと注意深く心を配る余地が欲しい」（ワシントン・ポスト紙七月四日）

わが国のメディアにとって大切なことは、報道の是非、人権との絡み、誤報や不完全な記事などについて、率直に問題を説明し、その経緯を公開する姿勢だ。日本の新聞に海外から学ぶべき点があるとすれば、その第一はこうした徹底した公開性だろう。

（前澤 猛「東京経済大学教授」）

## 放送時評

### 民放TVに自粛時間帯 郵政人事は中震規模

苦渋の選択だが実効は？

十月から、民放テレビは全局が午後五時―九時の四時間を「児童・青少年が安心して視聴できる自粛時間帯」とすることになる。これは、昨年の郵政省「青少年と放送に関する調査研究会」（座長、吉川弘之・前東大校長）十二月の提言を受けて一月発足の「青少年と放送に関する専門家会合」（座長、浜田純一・東大社会情報研究所教授）が六月十六日に公表した「取りまとめ」に民放連が対応した具体策の一つ。なお、同会合は郵政省、NHK、民放連、学識者、PTA代表ら九人のメンバーで構成された。

指摘された問題点は七項目。法的規制、公権力の介入を排除する建前がとられており、“被告席”に座った格好の民放連は即刻理事会を開き、自主的に取り決めを行い、全社に周知・徹底を図り協力を強く求めた。その中でこの「自粛時間帯設定」はわが国初めての試みであり、世の関心を集め話題を供している。

民放連の調査結果やビデオサーチのデータな

どを踏まえて決められたもの。理事会決定はこうである（六・二三「民間放送」）。

「17時―21時に放送する番組については、児童および青少年、とりわけ児童の視聴に十分、配慮する。ただし、具体的にどの番組をどの時間帯に放送するかは各局で判断する。なお、21時以降および休日の児童および青少年の視聴については、その保護者の方々にも一定の責任を担うことをお願いしたい」

特定の時間帯に通常より厳しい倫理コードをかぶせる制限は、欧米諸国やアジア先進国ではつとに実施しており、米、英、独、仏などは実に「朝六時から夜十時まで」。“テレビ大国”であるわが国は、この初めての試みでその仲間入りをしたことになる。専門家会合は「諸外国の自粛時間帯同様の配慮を行うことは有意義」とした。

言論・表現の自由を一義的に標ぼうしてきたテレビ界だが、ここ二、三年、少年による凶悪犯罪が多発し、大きな原因はテレビの過度な暴力・性描写」といった意見が、世論のようになってはもつけない。その故の“苦渋の選択”であり、自主規制の体裁をとつたものだけに「数歩の前進」には違いない。しかし現実には、これでどれだけの実効が期待できるか、である。

NHKは「本来、子どもが見て困る番組は作らないし、公共放送としてこれまで、全体的に性や暴力などの点で悪影響のあるような番組は流してこなかった」と時間帯制限には横を向く。番組審

議会が中央、地方ともそれなりに機能し、また、番組基準が現場ではつきり意識されている以上、「民放のシリぬぐいはまっぴら」と一線を引いたのは分かる。ただ夕方六時―七時台に「積極的に青少年向けの良質番組を編成する」として「少女向けアワー構想」を示し、専門家会合の顔を立てたにとどまる。

しかし、民放連放送基準や各社それぞれの番組基準をタナ上げにしたり、番組審議会また「居眠り状態」の民放界はとにかく商売一途。外部からのプレッシャーによるにせよ、自省、自粛のポーズを自主的にとつたこと自体は結構ではあるが、民放連内部の「夜十時まで」の提案が「それでは番組編成上問題があり過ぎる」と一蹴された実情は、このポーズを浮き立たせてしまう。

暴力、性に関する限り、現状でもこの時間帯にさしたる問題はない。ニュース、ワイドショー、アニメ、バラエティー、野球中継。アニメの中心、バラエティーのタレントたちの軽薄な言動が時に指摘される程度。一部の局のドラマ再放送枠が注目されなくもないが、大勢には関係ない。

九時からスタートする視聴率目当て、興味本位の連続ドラマ、低級なバラエティー、アクションだけが売り物のハリウッド映画の方にこそ、苦い薬が必要なのではないか。「編成上難あり」はイコール「商売上難あり」。他国の「十六時間自粛」を真似する必要もないが、せめてここに一步踏み込んでほしかった。実効のほどが注目される

ゆえんである。

番組向上への対応策

専門家会合が提案し、テレビ界が対応を決めた項目はほかにいくつもある。すべてを総括して「青少年とテレビ」関連療法」という性格。

一、まず「Vチップ」問題。「青少年と放送に関する調査研究会」の提言を受けて、「当面導入ノ」。俗悪番組を技術的に切り捨てるこの機械についてさらに検討を続ける。

一、その前提となる「番組格付け」。暴力性表現の度合いを示すレーティング(評定)は、不正確であるうえ、かえって好奇心をおおる恐れありとして、実施しない。ただ各社の判断によりさまざまに「事前表示」を行う。

一、「青少年向け番組の充実」として、民放は少なくとも「週三時間」その種番組を放送する。NHKは教育テレビ深夜時間を延長、「学校放送番組集中編成ゾーン」を新設。また、両者共同企画の番組を輪番で年二本制作、シリーズ番組として放送、再放送も行う。

一、「テレビおよび各メディアの特性を把握、理解する能力と判断力を身につける」メディアリテラシーについて、郵政省は今年度「調査研究会」を開催する。教育界、学識者、関係省庁がメンバーとなるが、この取り組みにテレビ界は積極的に協力する。

一、民放連はNHKと共に三―五年の長期の高度調査を大学等に委託する。また郵政省も研究機

関等の協力で、諸外国の実情を踏まえた調査を実施する。

一、民放連とNHKは自主的な機関として、放送番組向上協議会の中に「青少年と放送委員会」(仮称)を新設。来年四月開始を目指す。委員は有識者、視聴者代表で構成。これで同協議会は従来の「放送番組向上委員会」と併せ、二つの委員会を持つことになる。

そして民放連は各社に対し、上記を踏まえて次の四点を要望した。アニメ番組視聴には未就学児童も多いので、特に意識して制作を。ドラマの中で他人の人格を認める重要さを訴えるなど、情面の啓発を。バラエティーや学校舞台の番組などで「いじめ」を肯定的に扱わないよう。人気タレントの言葉遣い、振る舞いについては慎重に――。

「言つはやすく」とか「仏作つて魂は」などと皮肉に見ることは控える。また「家庭の責任」を言つ、捨てゼリフ、も聞き流すことにする。そしてわずか四時間の自粛がきっかけとなって視聴率競争にブレーキがかかり、青少年を無気力にする番組群が浄化されていくことを望む。

行革にらみ人事の面も

郵政省今年の本省局長級人事について書く。昨年は品川萬里(まさと)放送行政局長一人を除いてすべからず顔ぶれの変わる大揺れだった。だから「今年は微震か」と観測されたが、将来を囁目されていた高田昭義官房長が六月二十五日に死去し

たこと、二〇〇一年一月から自治省、総務庁と共に「総務省」に「行革」されることもにらみ、中震」と言つてよい異動になった。

以下である。カツコ内は前職、入省年次(昭和)年、出身校、年齢、出身県の順。谷公士事務次官(三十九年入省)、天野定功・電気通信局長(四十二年)、濱田弘二・郵務局長(四十四年)は留任である。七月六日発令。

郵政審議官・品川萬里(放送行政局長、四十二年、東大法、五十四歳、福島)、放送行政局長・金澤薫(通信政策局長、四十二年、京大法、五十四歳、大阪府)、通信政策局長・有村正意(まさおき) (首席監察官、四十三年、東大法、五十四歳、鹿児島)、官房長・松井浩(貯金局長、四十四年、東大法、五十二歳、京都府)、貯金局長・團(だん) (電気通信局電気通信事業部長、四十五年、東大法、五十一歳、長崎)

事前に「落馬寸前か」と取りざたされた二人、品川氏は長谷川憲正氏(四十二年)退官を受けて「事務次官同等」の郵政審議官に格上げ。野田聖子郵政相の信任が厚いといわれる。もう一人、有村氏の返り咲きは話題的。五十嵐三津雄前事務次官と折り合い悪く、最終ポスト、視される首席監察官に甘んじていたが、一気に通信政策局長に駆け上がり、高田氏亡き後の四十三年組のホープとなった。ホープと言えば四十五年組のトップを切つての團氏の貯金局長も見逃せまい。

(大森幸男「放送評論家」)

# 日本語、源氏、北朝鮮 出版界三つの潮流

藤田昌司

(文芸評論家)

## 『日本語練習帳』

出版界は今、日本語ブームだ。現在出回っている本だけで三十二点もあり、大型書店では日本語コーナーを特設しているところが多い。鈴木孝夫著『日本語と外国語』(岩波新書)、三浦つとむ著『日本語はどついう言語か』(講談社学術文庫)、大野晋・丸谷才一著『日本語で一番大事なもの』(中公文庫)、大岡信著『日本語の豊かな使い手になるために』(大郎次郎社)、川崎洋著『かがやく日本語の悪態』(草思社)、金田一春彦著『日本語百科大辞典』(大修館書店) などなど、実に多彩である。

そうした中では圧倒的なベストセラーになっているのは、大野晋著『日本語練習帳』(岩波新書)だ。〈練習問題を解きながら日本語の力をやしなう〉著者六十年の日本語研究から語る習練の手順と本の帯にあるように、本書は学生、社会人のための日本語トレーニングの本だ。

では、どのようなトレーニングを本書は勧めているのか。まず「単語に敏感になろう」。文章は一つ一つの単語で成り立っている。だから「まず単語の形と意味に敏感になりましょう」。そこで

練習問題。「思つ」と「考える」はどう違うか。それぞれの確な使い方を書いて下さい、ということになる。同じように、「うれしい」と「よこばしい」の違い。

日本語の文法についての記述も面白い。「日本語は非文法的言語だ」と森有正(フランス文学者)は言ったそだが、もちろん日本語にも文法はある。著者はここでは、「ハ」と「ガ」の使い方を取り上げている。例として

私は大野です  
私が大野です

の違いを挙げる。「ハ」の働きは三つあり、一つは「問題(topic)を設定して下にその答えが来ると予約する」ことであり、もう一つは「対比」に使われる。一の用例は「樹には 妖しさがあり」などであり、第二の用例は「暮は打つが将棋は指さない」など。これに関連して、「長いセントレンスは明晰さをそこなつ」と具体例を挙げている。ところで「ハ」にはもう一つ第三の使い方がある。

寿司を二つ、六時には持つてきて下さい。  
この「ハ」は「限度」を示す用例だ。

著者はまた、文章を書く心得として、「のである」「のだ」を消せ、と主張する。確かに、「のである」「のだ」が繰り返し使われると、著者が力んでいる、押しつけている、という印象を読者に与えてしまう。話のときに「の」であります」を使うのは、話に区切りをつけて教示・説明をまとめる役目がある。「のである」「のだ」はせいぜい一つの文章に一、二箇所、最後の締めくくりなどに使うのが妥当と言っている。

著者はさらに、文の組み立て、文章の展開、敬語の基本などの理解を深めて、日本語の技能を磨くことを勧めている。練習問題で折々に引かれる例文も面白い。例えば太宰治の有名な『斜陽』の初めの方にある誤った敬語の使用法の発見。何と一ページに三カ所もあるのだ。「悪文」を読んで文章を磨くのも一つの方法であることが分かる。

ともあれ、このような日本語の本が今、ブームになっているのも、いかに日本語が乱れているかを示す証左であろう。他山の石としたいものだ。

女性が愛読する「源氏」

文芸書は読まれないといわれて久しいが、今、季節外れの狂い咲きのように読まれているのが、『源氏物語』とその関連書である。とりわけ、瀬戸内寂聴の現代語訳『源氏物語』全十巻(講談社)は累計で二百十萬部を超すベストセラーになっている。

作家による『源氏物語』の現代語訳は、これまで与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子、田辺聖子

らによって成されており、そこに瀬戸内寂聴の訳が加わったわけである。「与謝野源氏」はまだ十分な参考文献もなかった明治の末年に訳したものに、大胆な意訳であるが、初めてこの訳業に挑戦した金字塔的作品であると同時に、登場する女性たちの心理を、情熱の歌人の心に映して解釈している点に特色がある。ついでに言つと、有名な書き出しの部分

へいづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひけるなかに……

この天皇様の御代であつたか、女御とか更衣とかいわれる後宮がおおぜいた中に……  
この「天皇様」という表現が戦時中、言論弾圧に引つかかつて伏字とされた。それだけでなく、『源氏物語』そのものが皇室の尊厳を傷つけるものであるとして、発禁焚書ぶんしよの議論さえあつたといふ。

次にこの訳業に取り組んだのが谷崎潤一郎で、昭和十四年から十六年にかけて、初めて逐語訳を試みた。今、これは「旧訳」といわれ、常体文(である調)で書かれているが、皇室に対する用語の制約があつた時代だっただけに、意を尽くし得なかつたものだ。そこで谷崎潤一郎は戦後昭和二十六年から二十九年にかけて、敬体文(です、ます調)で全文を訳し直した「新訳」を出し、さらに昭和三十九年から四十年にこれを現代仮名遣いに改めた「新々訳」を出した。

円地文字が昭和四十七、八年に出した『源氏物語』も逐語訳であるが、原文にある故事の解説なども本文の中に読み下し、また登場人物について訳者流の解釈を入れた点に特徴があつた。

田辺聖子の訳は、「与謝野源氏」同様、大胆な意訳を試みたものである。書き出しの部分を紹介しますと、

光源氏、光源氏と、世上の人々はことごとしいあだ名をつけ、浮わつた色いろこのみの公達、  
ともてはやすのを、当の光源氏自身はあじけないことに思っている。……

と原文には全くない文章で始まり、へ帝にはあまたの女御やお妃がいられたが、誰にもまして熱愛されたのは……と原文の冒頭部分が出てくるのは十九行目からだ。『源氏物語』の原文には多くの相聞の和歌が出てくるが、田辺源氏ではそれもほとんど姿を消し、本文の中に溶かし込まれている。

「瀬戸内源氏」は正攻法の逐語訳で、分かりやすい現代語に置き換えられているが、優れた特色は全十巻の各巻末に付されたかなり長文の解説である。人生の前半は奔放な恋に明け暮れ、後半は一転して出家落飾、厳しい戒律の中に身を置く訳者だけに、登場人物たちの心理の解説は随一だ。特に光源氏をめぐる女たちの愛欲の種々相と、その果ての出家ないしは出家願望の解説は、鮮やかとしか言いようがない。

それにしても、今なぜ「源氏」なのか。恋愛小

説の第一人者、渡辺淳一の『源氏に愛された女たち』は、へ男と女の思いは、いまも昔も変わらず、永遠に同じ円の上を廻つて、進歩しないからである」という。同書は現代の恋愛論であると同時に、『源氏物語』の優れた手引書ともなっているだけに、やはりベストセラー入りしている。「源氏」に関する入門書はこのほかに、『わたしの「源氏物語」(瀬戸内寂聴)』、『源氏物語』の男たち(田辺聖子)、『週刊光源氏——特別保存版総集編』などが出て花盛りの観を呈している。

一つだけ付け加えれば、こうした「源氏」ブームを支えているのは、女性読者たちだということである。「瀬戸内源氏」二百十萬部の七割以上は女性だというし、その他の入門書も圧倒的に女性読者に支えられている。渡辺淳一が指摘するとおり、男女の愛は千古不易といふこともしれないが、『源氏物語』はいわばセクハラ小説である。それを現代の女性が愛読しているのはなぜか。女性には永遠にミステリアス、と言つほかない。

北朝鮮の闇を照射する

北朝鮮に関する本もブームだ。大手取次店調べによると、五月現在四十点以上に上つているが、今日ではそれより数点多くなつてると推定される。その一つ、萩原遼の『北朝鮮に消えた友と私の物語』(文藝春秋)はこのほど大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した。著者は一九三七年、高知県生まれ。大阪外語大朝鮮語科を卒業して、「赤旗」記者となつたれっきとした共産党員で、一年

間平壤特派員を務めた経歴の持ち主。

同書の内容は二つの流れから成る。一つは大阪の定時制高校時代の親友で一九六〇年の「帰国運動」の際に北朝鮮に帰った尹元一(ユン・ウォニル)の消息を、平壤特派員となった著者が尋ねようとして監視の網にかかり、やがてスパイ容疑で追放されるいきさつ。もう一つは一九四八年の韓国・済州島の武装蜂起に少年ゲリラとして加わり、その後日本に潜入して朝鮮総連の活動家になる金竜南(キム・ヨンナム)の物語だ。著者は「受賞のことば」として、こう述べている。

「……四十年前、「地上の樂園」の言葉に魅かれて希望に満ち北朝鮮への帰国船に乗った十万人近い在日朝鮮人と数千人の日本人妻の悲劇。そこは地獄でした。電話の女性(注、受賞の報道に、著者に電話でお祝いを述べてくれた在日朝鮮人の女性)も苦勞して育てた三人の息子を帰国させ、二人がスパイのぬれぎぬで殺されています。……」

北朝鮮に関して忘れられないのは、赤軍派による一九七〇年三月の「よど号」ハイジャック事件だ。主犯の田宮高鷹は既に死亡したと伝えられるが、ハイジャック犯人グループの一人で、最近偽ドル使用の疑いでタイで逮捕された田中義三被告が日本に護送されることになっているので、事件の真相がどこまで解明されるか、注目したい。そうした中で、高沢皓司の『宿命——「よど号」亡命者たちの秘密工作』は、著者が田宮高鷹と数次

にわたるインタビューを行い、また彼らの足跡も検証して、この事件の闇に光を当てたルポだ。

田宮らは「我々は」あしたのジョー」である」と呼号し、北朝鮮に亡命した後、日本に再上陸して世界前段階革命を引き起こすというシナリオで行動したが、彼らの幼稚な革命理論は北朝鮮で顧だにされず主体思想によって洗脳され、その傭兵とされる。洗脳が済むと彼らは金日成の指示で結婚させられる。相手は日本国内や欧州各地で獲得させられる。結婚した女性も洗脳される。そして男女コンビを組んで世界各地に出て、謀略、誘拐、拉致などで暗躍するのだ。著者が全共闘体験者だったことも、付記しておく。

このほか、北朝鮮から韓国に亡命した元高官、黄長燁の『北朝鮮の真実と虚偽』(光文社)、やはり韓国に亡命した女優の『北朝鮮女優日記』(乗原聡訳、ザ・マサダ出版)なども注目の書だ。

新・南京大虐殺のまぼろし

最後に鈴木明の『新「南京大虐殺」のまぼろし』(飛鳥新社)を紹介しよう。この著者は二十六年前、『南京大虐殺』のまぼろし』で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞し、センセーションを巻き起こしたが、今度は全く新しい視点と、数次にわたる中国取材から、この事件に光を当てている。本の帯に「虐殺論争」に終止符を打つ、衝撃の発見!とあるが、「衝撃の発見」とは何か。南京大虐殺のシナリオの原本を書いた張本人は、アメリカ人ジャーナリスト、エドガー・スノーだ

というのだ。本書はこの「新発見」にたどり着くまでの経緯を詳細に書いている。

エドガー・スノーといえば、まだ延安時代の毛沢東に単独インタビューした世紀の大スクープ『中国の赤い星』の記者としてあまりにも有名だ。そのお膳立てをしたのが、宋慶齡(孫文未亡人、蒋介石夫人宋美齡の姉)であったことは、今日では明かになっているものの、当時は二人ともこれを秘密にし、事実を公にしたのは一九五三年だという。ともあれスノーはこの特ダネをものにすべく、宋慶齡を頼った。宋慶齡は側近の王牧師を呼んで毛沢東に密書を託した。毛沢東からアメリカ人ジャーナリストを歓迎するとの返書がもたらされた。やがてスノーに連絡があり、一見しただけでは白紙としか思えない毛沢東あてのあぶり出しの紹介状と、無雑作に引きちぎった宋慶齡の名刺の半分が渡される。西安へ行ったら、この名刺の片方を持参する男が現れるから、その指示に従うようにとのことだった。こうして、スノーの特ダネ・インタビューは実現する。

『中国の赤い星』によりスノーは一躍有名になり、ルーズベルト大統領と数次にわたり懇談するほどになるが、そのあと、『アジアの戦争』を出版する。その中に、南京、上海進撃中に、日本軍は三十万人の人民を虐殺したというくだりが出てくるというのだ。ただし中国で三十万という数字は「三千世界」などと同様に多数という意味であり、実数を意味するものでないとのことだ。



## 冷静報道目立つ露マスコミ

コソボ、自国の立場を優先

三月二十四日のNATO空爆開始に始まる今度の「コソボ戦争」は、最も先進的な欧米諸国のハイテク技術が総動員された、それにもかかわらず決着がつかず、結局、主要八カ国(G8)經由で国連主導型の政治解決に引き戻された。そのことが主要国関係を変えつつある——など冷戦後、一時代を画する事件だったと言える。

もう一つの出来事は、世界のマスコミが、この戦争の行方を左右する、かつてない大規模な役割を演じたことだ。新聞、テレビに加え、新たにインターネットが登場した。空爆開始の最初の二日間だけで、米CNNインタラクティブに寄せられた意見は百万件に達したという。「戦争のマスコミ化」と言ってもよい新しい現象だろう。

それは決してプラス面だけでない。世論が嫌う犠牲者を少なくするための空爆の継続、「人道的戦争」の鼓吹、戦果の誇張などの非現実的な戦略、政治・外交的手段の出遅れなどのマイナス効果もたらした(六月十六日付ジャパン・タイムズ、シーガル英国国際戦略研究所長の論文「民主主義的な戦争」参照)。

この戦争の過程で注目されたのは、一九九四—

九六年NATOの東方拡大に反対し、結局、妥協していたロシアの出方だった。空爆が開始されるや、ロシアはアドリア海に情報収集艦を含む七隻の艦隊を派遣すると発表。空爆への妨害もしくはユーゴスラビア側への情報伝達のため、とする見方が西側マスコミには一気に高まった。だが、それはロシア人とセルビア人が同じスラブ系だからという単純な思い込みにすぎなかった。

それはセルビア議会が泥縄的に「スラブ連邦」の結成を呼び掛けたとき、ロシア側が一顧も与えなかったことで分かる。「ロシア自体が連邦維持に苦勞しているとき、問題のセルビアを抱え込むなど、とても、とても」がロシア・マスコミ一般の反応だった。NATO側に依頼されてロシアはユーゴスラビアとの調停役となったが、担当したチエルノムイルジン特使(元首相)はミロシエビッチ大統領に譲歩を求めるNATO寄りの説得使として行動している。

四月初め、「独立新聞」は全面六ページに及びコソボ問題特集を掲載した。それは客観的描写と言えるもので、紛争と空爆の経過、NATO軍の配置、被害の状況、各国の政治動向を詳しく分析している。そのうえでNATO空爆を「戦術的には成功、戦略的には敗北」とみなし、「既にNATOを抑える大国はなく、これ以上、無分別が続けばロシアにも異常な心理が起き、健全な思想が失われることになる」と結論している。この特集は軍事専門家を総動員したとみられ、国防当局の

立場も同じと言ってよい。つまり、ロシアが最も警戒したのは自国に影響が及ぶことだった。

米・欧・露三者作成の最終和平案をミロシエビッチ大統領が受諾し、NATO平和維持軍のコソボへの進駐開始直前の六月十一日、米英両国先陣争いの間隙を突いて、ボスニア駐在のロシア軍二百人が突然コソボ入りし、州都プレスティナの空港を占拠したことは世界を驚かせた。翌週、コメルサント・デイリー紙が報じたところによると、この秘密計画は参謀本部の高級将校二十人によって練られ、同日朝、キャシニン参謀総長が直接エリツィン大統領に会い、裁可を得たとのことだ。

このロシア軍の行動を西側マスコミが「不満の爆発」とか「憂さ晴らし」とみたのもやはり見当違いだろう。別の参謀本部幹部が、第二次世界大戦(ベルリン陥落)から学んだ「素早く、確実に」の教訓によると語っているからだ(同紙)。

総じて言えば、コソボ・空爆問題に関するロシア・マスコミの報道ぶりは驚くほど慎重で淡々としていた。十二日朝、ロシア・テレビは先駆けロシア部隊がベオグラードを通過、セルビア人が歓呼して迎える様子をちらりと映し出したとき、若い女性アナウンサーはくすりと笑いながら「セルビア人にとってロシア人がまるで唯一の保護者になったようです」とコメントしていた。「なんてまあ子供っぽい人たち」というつぶやきが思わず漏れてきそうな雰囲気だったのである。

(高橋 実=評論家)



## 念願の仏への進出成らず

メディア王に厳しい状況続く

世界的規模でメディア事業を展開しているルパート・マードックが支配するイギリスの有料衛星テレビ「BスカイB」の株一七%を、六月上旬に、フランスの電気通信事業体「ビベンディ」が取得した。これがヨーロッパ大陸への進出を図ってきたマードックの動きにタガをはめることになったのでは——との観測も生まれ、マードックの今後の動きに注目が集まっている。

マードックは現在、持ち株会社を通じ、イギリスでBスカイBの株四〇%と「トークラジオ」の株二〇%を所有するほか、ヨーロッパ大陸でドイツの衛星テレビチャンネル「VOX」の株四九・九%とミュンヘンのテレビ局「T M 3」の株六六%を所有し、困難な交渉の末、今年五月にイタリアの有料テレビ「ストリーム」の株三五%を取得した。

だがフランスの放送事業にはまだ進出していないため、マードックは今年初めから、BスカイBとフランスの有料テレビ「カナル・プラス」との合併交渉を進めてきた。しかし交渉は不調に終わった。その直後に、フランスの「パテ・シネマ・グループ」が所有していたBスカイBの株一七%

をビベンディが取得したという経緯であった。

ところがこのビベンディは、カナル・プラスの最大の株主でもある。そこでBスカイBとカナル・プラスとの合併の話が再登場するのでは、との観測も生まれてきた。

だがその一方で、もしこの両企業が今、合併するならば、ビベンディの操作により、フランスのグループのほうがより大きな株所有に終わるであろうから、BスカイBにとって得策ではない、との見方も登場してきた。

さらに合併を妨げる材料もある。五月末に株の三五%を買収したストリームとイタリアでライバル関係にある「テレビユー」が、カナル・プラスによって支配されているからである。

そのうえBスカイBはもはやイギリスの有料テレビ市場で実質的な独占を享受できなくなっており、CATV業界や新登場の「オン・デジタル」から激しい挑戦を受けているというが、BスカイBのライバルになるこのオン・デジタルに技術提供を行っているのが、カナル・プラスである。

こうした状況に対しマードックの側は、フランスへの進出は強く願望しているが、BスカイBが再びカナル・プラスに働きかける可能性はないとして、「いま地平線には何も無い。われわれがまた話し合いに入るなどと推測するのは誤りだ」と語る。そして、カナル・プラスの方がむしろBスカイBとの合併を求めているのではないか、協力とか合併に関する動きはいまのところすべてカナ

ル・プラスの側から出ている、われわれの方がはるかに利益を上げている、と主張する。

総じて大方は、マードックがヨーロッパ大陸の中心部への進出に成功する可能性について、かなり懐疑的である。ある銀行家は、マードックは恐ろしいとの評判が実像に先行しているとして、「だれも彼を信用しない。だれも彼と取引をしようとしなない」と言う。

カナル・プラスとの交渉が、失敗に終わった唯一の事例ではない。最近でも、イタリアのペルルスコーニ元首相が支配するテレビグループ「メディアセット」との交渉に失敗し、ドイツのメディア王レオ・キルヒとの事業提携の話し合いも無に帰した。

あるアナリストは、マードックにとっては今がBスカイBの売り時だと言う。BスカイBはスポーツの放映権を買い占めることで視聴者を引き付けてきたが、買い占めの値段は今後さらに上がるばかりだとの理由からである。

それに対しマードック側は、BスカイBは新しい一四〇チャンネルのデジタル・サービスに膨大な投資を行ったところであり、売却など全く考えられないとして、「これは世界で最も価値の高いテレビ資産の一つだ。われわれがこれを売ることは断じてない」と反論する。

マードックにとっては、なかなか厳しい状況が続くもようである。

(広瀬 英彦 東京大学教授)

### メディアの監視機能を公認

#### 中国・珠海市が新規定発布

近年、中国では、行政の腐敗監視のため、メディアにもっと積極的な役割を担わせようという声が共産党内からも聞かれるようになった。しかし、いくら「世論による監督」という言葉を広めて、メディアが一定の「権力監視機能」を持つことを「公認」したからといって、記者が実質的な裏付け無しに、巨大な既得権層に対するのは難しい。そんな中で、中国・珠海市共産党委員会が五月に発布した、取材と報道にかかわる新規定「珠海市新聞世論監督弁法（試行）」が注目されている。

同規定は、報道機関の「監視」機能を極めて積極的に位置付ける一方、取材を受ける側の党や行政機関、また企業や各種団体などに対しては「取材拒否」や「検閲」を原則的に禁じるもので、共同通信によれば、全七章二十六条から成り、概要は以下の通り。

世論による監督は、珠海市の大衆がメディアを通じ社会を民主的に監督する重要な手段である。

監督範囲と内容は、全市の共産党、行政、司法、企業、団体などで起きた官僚主義や職務怠慢



全市の企業の違法行為、国益や公衆、消費者の権益を損ねる行為、全市の指導幹部の民主と法制にかかわる問題——である。

党、行政、司法、企業、団体などは、国家安全や機密、秘密にかかわるもの以外はすべて報道による監督を受けねばならない。

市の報道部門や報道機関に対して、いかなる機関や個人も取材拒否できない。

批判報道に際し、だれであれ批判される側が事前検閲してはならない。批判される側の異議は正当なルートを通じ表明することができる。

市党委と市政府が「報道チェック協調指導小組」を設置。同小委は公開報道してはならない問題について「新聞内部参考」を編集し、関係部門と指導者に閲覧させる。

同弁法発布の二ユースは、新聞出版署機関紙・新聞出版報も、六月十一日付一面トップで「批判を受ける者は、検閲を要求してはならない」という見出しを掲げて紹介した。同紙によれば、この規定は各地の地方党委員会が注目し、また、報道界に大きな反響を呼んでいる。

ところで、同紙のトップ記事のすぐ下に配置された「報道はさらなる自律を」という見出しの署名コラムは、中国における取材・報道上の問題、媒体の本音を率直に語っていて興味深い。

筆者は言う。  
「正しい世論監督を実施することは、党および人民の一貫した願いである。全国人民代表大合や

政治協商会議でも、世論監督実施に向けてさまざまな呼びかけが行われている。しかし、呼びかけは呼びかけとして、報道機関による監督を、紙面や番組の中で真に実現することは極めて難しい。

中央レベルの大手紙ですら、組織なり、事件なりの真相を暴露して、批評を加えるためには、多くの抵抗、障害を排除しなければならぬ。一番の問題は地方の保守主義で、二番目は検閲突破の難しさだ。批判記事の原稿を、取材対象に事前に戻すと、待てど暮らせど戻ってこない。ある記事など一年半も棚上げされ、記者の意欲を大いにくじき、世論監督も相当割り引かれてしまった」

こんな状態が一般的にあるからこそ、珠海市の規定が「尚方宝剑」（皇帝から賜った、切り捨て御免の権限を付与された剣）とまで持ち上げられ、歓迎されているわけだ。

しかし、出版報コラムの筆者は、この規定の持つ意義を高く評価しつつ、媒体関係者に対して次のように釘を刺す。

「市当局がわれわれを支持してくれるならば、なおのこと、われわれは冷静に、そして厳格に自らを律しなければならない。監督を行う際のキーワードは、一にも二にも正確さだ。そして事実、証拠に基づくこと。取材対象へ記事を回すことがあってもいい。細心の注意を払わなければ、今日のスクープも、明日は訴訟沙汰である。どうしてわざわざそんな面倒を背負い込む必要があるか」

（木原正博＝新聞協会）

### 調査会 事務局長に猪目寛氏

新聞通信調査会事務局長の石川喜代美氏は七月末で勇退、後任には八月一日、猪目寛氏(元共同通信会館取締役・事務局長)が就任した。

猪目氏は共同通信社では大阪支社総務部長、本社総務局次長などを歴任した。

同盟棋友会(中野正彦会長)の夏季囲碁大会は七月三日(土)正午から同盟クラブで開催。二十二人が参加して熱戦の結果、A組は吉沢正也七段、B組は高橋浩二段、C組は荒谷康司初段が優勝した。三氏以外の参加者は次の通り(順不同)。

- A組 小沢信昭、堀川敏雄、江口浩、今在義忠、堂添慶瑞
- B組 作田吉男、中野正彦、吉川吉太郎、成田安賢、西山武典、小林敏雄、持丸治
- C組 湯田横二、吉田鉄夫、三ヶ野大典、小林省三、横瀬義雄、仲晃、内田貞雄

新聞通信調査会は七月二十八日(水)午後同盟クラブで、信太謙三氏(時事通信社前北京支局長)の「中国建国五十年」と題する講演会を開いた。同盟クラブはこのあと、東京・有楽町のニュー・トーキョーで恒例の消夏生ビール会を開いた。参加者は七十四人。

【新住所】

四八一 山梨県北巨摩郡長坂町大井ヶ森

一七六―七八六

二四七一 五五一―三二七六五六

田口 三夫

九 横浜市栄区鍛冶ヶ谷

二一六―九一〇二三

四五一―八九六一―三三六四

高橋 忠

### 【悲報】

宮脇 豊喜氏(元時事通信社写真部員) 脳内出血のため六月二十九日死去。八十五歳。喪主は妻あぐりさん。自宅は春日部市南四一―一二。

沼田 勲男氏(共同通信社情報システム局長) 胃がんのため七月二日死去。五十四歳。喪主は妻香世子さん。自宅は川崎市宮前区宮崎六―五―八三。

川崎 正雄氏(元共同通信社名古屋支社長) 肺炎のため七月三日死去。九十一歳。喪主は妻鶴子さん。自宅は横浜市保土ヶ谷区岩井町二三一。

矢島 重巻氏(元共同通信社ニューメディア・センター長) 大腸がんのため七月二十二日死去。六十七歳。喪主は妻玲子さん。自宅は東京都世田谷区桜上水二―一―二〇。

虎ノ門句会

平成十一年六月十七日 同盟クラブ

ねむの花内緒話を聞き閉ぢぬ 六郎

風鈴の似合ふ昔のたたずまひ 義明  
千枚田命をつなぐ畦を塗る 博一  
丹精の新ジャガ重し朋友の情 易信

### 目次(八月号)

新疆、西藏、中央アジアの旅 坂井 定雄 1

「原爆外交」が冷戦促進 金子 敦郎 4

日本語、源氏、北朝鮮 藤田 昌司 14

【メディア談話室】

「説明責務」と「知る権利」 田所 泉 8

【プレスウォッチング】

海外の新聞から学ぶ 前澤 猛 10

【放送時評】

民放TVに自粛時間帯 大森 幸男 12

【海外情報】

世界を制覇したCNN 佐々木謙一 7

コソボ戦争に冷静な対応 高橋 実 17

念願の仏への進出成らず 広瀬 英彦 18

メディアの監視機能を公認 木原 正博 19

定価一五〇円 一年分一五〇〇円(送料とも)  
発行所 財団法人 新聞通信調査会  
〒一五一 東京都港区虎ノ門一―五―一六  
(晩翠ビル四階)

印刷所 株式会社 太平印刷社  
振替口座 一一一―四一七三四六七番  
(三)三五九三一―八一(代)  
©新聞通信調査会1999